《Vom Übersetzen》要旨

斉藤　治之

どの外国語からであれ母国語への翻訳の際には種々の障害を克服しなければならないが、ドイツ語と日本語のように文字や言語体系の全く異なる言語の場合はさらに大きな困難が待ち構えている。ドイツ語の übersetzen “翻訳する（<越えて置く）”という語からも明らかなように、翻訳者は“ある事柄”を向こう岸へいわば深い谷を越え事柄が損なわれないよう注意を配りながら、“渡す”作業をしなければならない。また文学作品の翻訳は“形式”、“韻律”、“内容”の三要素に留意しなければならず、文化圏の相違と相俟って、その労力はさらに増加する。例えば“形式”、“韻律”の存在しない言語への翻訳において、たいていの場合、それらの要素は原文に忠実に訳されることはなく、また、“内容”についても同様である。どの程度原文に忠実に翻訳するか、つまり“形式”を重視するかあるいは“内容”を重視するか、は原文の表す意図に拠っており、はっきりそれとわかる Poesie “詩文”の場合を除いて“内容”がより重視されることが普通である。翻訳者が克服すべきさらなる障害は原文に対する健全な距離の維持であり、訳者は原文への過度の感情移入に自分を見失うことなく、ある程度離れた視点からすべてを見通さなければならない。つまり翻訳は自分の母語に対応するものでなければならない。しかし実際は、Lyrik “抒情詩”の場合特に、しばしば母語の犠牲において母語に異質の要素を差し挟んだり、恣意的に語を創造することを余儀なくされることがあり、そのような文法的・言語的違反は抒情詩の特権と見なされている。

日本語からドイツ語への翻訳の際生じる困難の原因として両言語間に存在する文法的・言語的相違が挙げられる。それらは具体的には、日本語における文法上の性および単数複数の区別の欠如、関係代名詞・再帰代名詞の欠如、名詞曲用の欠如、時制の明確な区別の欠如、日本語の助詞“の”の機能の区別、そしてとりわけ漢字の存在、等である。

これらの困難にもかかわらず、翻訳は外国語と母語への探検旅行であり、原文は翻訳者を未知またはすでに忘れ去られた領域へと誘うものである。訳者は原作者の普遍性と独創性の前にうやうやしく頭を垂れ、抒情詩の熟達した深みは、その翻訳作品において、訳者の付け加えを伴わない芸術的な対応物の成立を呼び起こすのである。またこのことは本論文において例としてあげられた数編の日本語原詩とそのドイツ語訳からも十分見て取ることができる。